

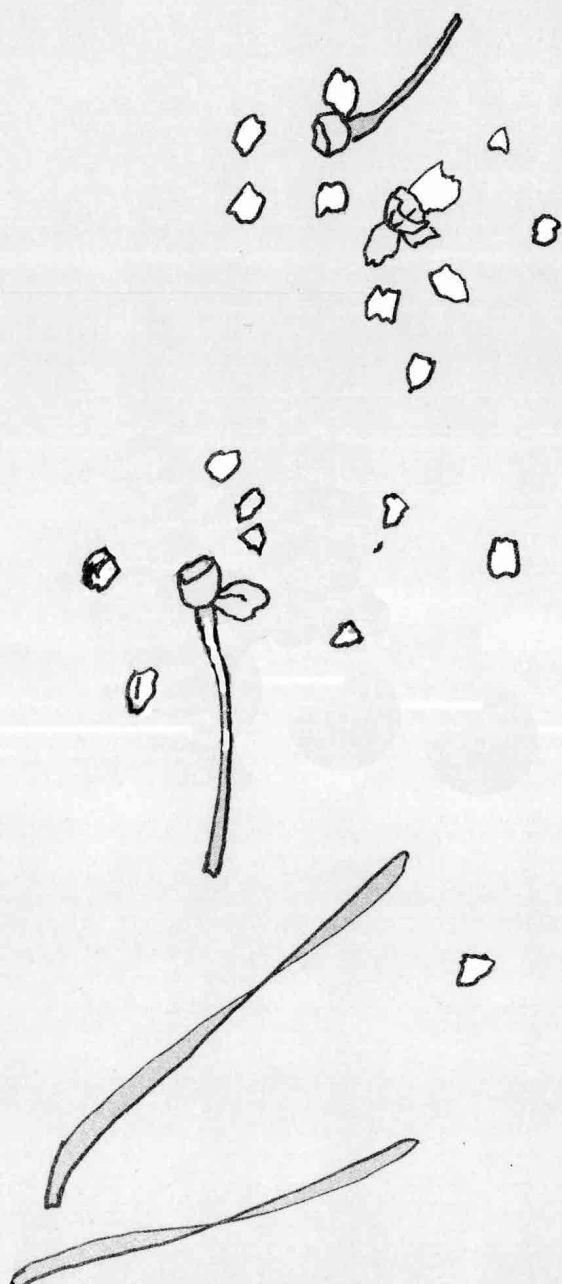
大原富枝

地上を旅する者



地上を旅する者

大原富枝



地上を旅する者

大原富枝（おはら・とみえ）

一九二二年、高知県に生まれる。高知女子師範を結核を病み中退。三九年「祝出征」が芥川賞候補となり作家生活にはいる。五六年「ストマイつんば」で女流文学賞、六六年「腕という女」で野間文芸賞、毎日出版文化賞をそれぞれ受賞する。その他の著書として「建礼門院右京大夫」「アブラハムの暮會」「忍びてゆかな小説津田治子」等がある。

一九八三年三月二五日 第一刷印刷
一九八三年三月三〇日 第一刷発行

定価 一一〇〇円

著者 大原富枝

発行者 福武哲彦

発行者 株式会社 福武書店

東京都千代田区麹町六―六

千〇三電話〇三三三〇―二二三一

振替口座（東京）六一一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

（著・乱丁本はお取替え致します）

地上を旅する者 目次

第一章 冬青木坂

7

第二章 白い祖母

37

第三章 からくり

77

第四章 跫音

110

第五章 移りゆくもの

143

第六章 山の湖

173

第七章 地上を旅する者

207

装丁
朝倉
撰

地上を旅する者

第一章 冬青木坂 もちのき

その高いビルディングの正面から、浦賀利江はゆっくりとつべんを仰いでみた。十数階を数えることができた。幾何学的に、低く刈りこんだ植込みのある前庭は、駐車場を兼ねていて広く、彼女はそこに佇んでいた。庭の隅にも一人、入口のドアの前にはそれぞれ三、四人の守衛らしい人が立っている。みんなが彼女の方を見ていたが構わずじっくりあたりを眺めて、目的の場所を見極めようとしていた。その高層ビルには有名な銀行や不動産会社がいっている。

戦災から復興し、地下鉄も完成したこのあたりは立派な高層ビルが並んでいて、祖母や母に見せたらとても昔のことは思い出せないというだろうと思う。母の書いてくれたたどたどしい地図では、靖国神社ばかり大きく書かれていて、そのほかは、八百屋、荒物屋、薬局、交番などどびとびに不揃いに記入してある。娘に是非と頼まれて、五十年あまりも昔の記憶をけんめいに探り、探りして、鉛筆をなめてはこれを書いている母の姿が眼に浮んでくる。

靖国神社はもちろん、いまもでんと広大な地域を占めて確かに存在しているが、八百屋や荒物屋がいまもあるはずはない。結局、母が少女のころ奉公（いまでも母は奉公としか言わないの

だ)していた家のあったあたりは、いまはこの高層ビルの隣り合っている大きなホテルの敷地になっている、としか考えられなかった。

ホテルの前も駐車場を兼ねている庭であったが、敷地はホテルとしては建物の大きさの割には窮屈で、中級クラスというところであろう。庭園は望むべくもないので駐車場と前庭を兼ねた一隅に、人工の小さい滝を造ってあった。山の岩石をコンクリートで敷き固めた崖の上から、水がカーテンのように薄い幕になって光りながら落下する仕組みになっている。二段になっている上の段は一メートルほど、下のは二メートル半ほどの高さで、幅もせいぜい二メートルそこそこの可愛らしい滝である。眺めている浦賀利江の眼に、ふと、「布引の滝」と書かれた金属の柱が立っているのが見つかった。浦賀利江はうっすらと笑ってしまった。

ホテルの横手へ廻ると、大通りから一つだけはいった狭い、ひっそりした町並が崖下に残っている。年末の真昼というのに人通りはまるでない。ホテルへ客をはこんできた、あるいはホテルの客を乗せて出てゆく車が、建物をひと廻りして出てゆくタイヤの音が聞えるほど静かであった。かつては竹箒やみそこしなど商っていた荒物屋、洗い張り屋などの、ちまちまと並んでいたはずのその通りを、浦賀利江はゆっくり歩いて行った。

この裏通りでは時が佇んでいるように何もかもが静止している。依然として人には逢わなかった。細い横丁の切れ目のところだけ、大通りの雑踏が見え、車の騒音が耳にはいつてくる。大通りと反対の側の家々の後には高々と絶壁になっている崖の膚が見えた。岩盤の膚は小さい植物が生え、蔓草がはっている。長い風化のあとが見え、その上に古い堅固な洋館が、押し被さるように高く建っている。

谷底のようなこの町には商店はなく、仕舞うた屋か、小さい会社、倉庫などが多く、もう今年の仕事仕舞いをしてシャッターをおろし、形ばかりの小さい松飾りをしてあったり、なかったりするのであった。昔はここいらにも小さい商いの家が並んでいて、前垂れをかけた少女時代の母がちよこちよこ小走りにお使いに走っていったりしたのであろう。浦賀利江はいいかげん歩いてから引返し、ホテルの裏の坂道をのぼって行った。かなりの急坂になっていて、頂上に近いあたりに「冬青木坂」と記した細い柱が立っている。彼女はそれを眺めて佇ちどまり、考えこんだ。早速には読めない文字であった。忍冬とか万年青とか、似通った名詞が浮んでくるが、ちがっているはずとすぐわかる。結局もどかしい思いをしながら、坂を上っていった。読めなかったこの坂の名がしかし、なんとなく気には入っている。いまが真冬であつたからでもある。

ある国の大使館の角を折れて鉤の手になったもう一つの坂道をおりてゆく。K中学ともう一つ有名な私立の学園が坂の両側にまたがっており、個人の豪壮な邸も間にあつた。

崖の上に学校がいくつもあつて、華族さんのお邸もあつたぞよ。息子さんがロシヤへ行つてしまうというて、大騒ぎが持ちあがつた華族さんがあつたらう？

母がそう話したことがあつたのを、改めて思い出し、坂道をずうっと下の方までおりて行つてみたが、結局それはわからなかつた。華族という階級の消滅したいま、もとのところに邸があるはずもないとも考えられる。

この坂道にも名前があり、「二合半坂」と記して、その名の由来を考察した立札もあつた。それによると、昔はこの急坂から日光山が半ばまで見えたとのによる、とある。

（富士山を一合から十合まで数える例により、日光山をば五合にみつもりて言えるにや。）と、

『江戸砂子』という本に書かれているという。日光坂とも呼ぶ、とも書かれている。

立札の向う側は修道院になっていた。浦賀利江が立札の文字を写しとり、坂道を往復するあいだ、車は一、二台坂をのぼってきたが、学園も年末休暇で生徒の姿もなく、修道院に入りする人もなかった。明るい光が充ちている修道院の庭に、黄色の落葉がほんの少し散っている。朽葉の疎らに残る蔓薔薇のアーチが距てている奥の庭からも、何の物音も聞えて来ない。浦賀利江はその坂道をゆっくりとまたのぼって来た。二、三台のタクシーに追いぬかれただけで、人には逢わないのであった。

冬青木坂と、なんとなく懐しい名に惹かれてもう一度そこを下りながら、子守の祖母が靖国神社の境内へよく子供を遊ばせに行ったという道筋は多分この道であつたらう、と思つた。

大通りの方は、そのころでも荷馬車や、近くの花柳界のお座敷着の女や客たちを乗せた人力車が、威勢のいい掛け声で往来していたであらうから。舗装されてはいるが、この足の下には、まだ少女の祖母が田舎から出て来たばかりで、何もかもに驚きながら、ときには叱られて涙ぐんだりしながら、上り下りした同じ土がある。いま自分が踏んでいる、と思う。大都会のなかの小さい坂道であるために、他所では感じられない坂道というものの表情がここにはある。

地下鉄の駅に出ると、坂上にいま陽が落ちるところで、靖国神社の杜が紅く染っていた。西の空だけ晴れてきている。浦賀利江は眼の上に手をかざしながら、しばらく落日を見ていた。落日の光景というものには、いつ、どこで眺めても、なぜか、永遠というもの、永続した時間という手応えを思い起させるものがある。それをいまも思っていた。多分、祖母も、母も、この坂道の上の落日を何度か眺めたことがあるはずであつた。

その夜、今日歩いてきた町のメモをノートに写していると、電話のベルが鳴りはじめた。鳴りつづける受話器を浦賀利江は眺めていた。誰からのものであるかわかっていた。取りあげたいような、取りあげたくないような、一瞬気の迷いがあった。しかし、もちろんそのまま鳴らせておくわけにはゆかなかった。

どう、行って来たの？

予期した通りの、低いくぐもった声が流れて来た。蓮見由直の仕事部屋の、年末が来たからといってべつにどうということもない、本や資料を入れた大封筒や、ファイルなどの雑然と重なり合いながら散らかっている様子が、彼女の頭のなかには見えている。

はい、少し歩いて来ました。そちらはもうお片づきになりましたか。

いや、相変らずさ。あんまり片づけるとこんど始めるとき紛失ものが出たりして困るからね。ほんとうにね、と答えて浦賀利江も笑った。ふと思いついて彼女は訊いてみた。

冬、青、木、坂、おわかりですか、この坂の名前が。

勝手がちがつたらしく、相手はおうむ返しに繰返した。

冬、青、木、坂？ ふーむ……

浦賀利江は含み笑いをした。たったいま、辞書をひいてその読み方を知ったばかりである。なんか、畏があるんだろう？

笑いように聞き咎めて、蓮見由直は用心深くなった。

いえ、畏なんかあるのですか。素朴に、字の通りなんです。

ああ、あれか。ほら赤い実のあるじゃないか。あおき坂、ちがうか？

ふふふ、素直すぎました。青木には冬はいりません。もう少しひねって考えて下さい。結局、もちのき坂、と教えて、彼女はくつくと忍び笑いをした。

なあんだ、ふーむ、やっぱり罫じゃないか。とても思いつかないよ。もちのき坂、なんて。口惜しくなくもないように、蓮見由直はまだ言っている。

もう一つお伺いしたいのですけど、『江戸砂子』という本があるそうですけど、ご存じですかしら？

訊き返されて彼女はこまかく文字の説明をした。

耳にしたことはある気がするけど、はっきりしないねえ。江戸の町の口碑、伝承などを集めたものじゃないのかねえ？ と、ほぼ彼女自身の考えと同じことを言い、気をつけてみよう。わかったら知らせるよ、と答えた。

お願いします。それで場所ですけどね、大きなホテルの敷地に吸収されているのです。前庭に小っちゃい人工の滝がありました。それだけ眺めて帰りました。ロビーにはいつて見ても仕方がないでしょう。

浦賀利江はその滝には、布引の滝と書いてあって、なおよく眺めてみると、「この水は還流水です」とことわってあったと話し、声に出して少し笑った。

なんだか一瞬、私は絶望したのですよ。なにか、深い絶望を感じました。滝の水がいやな臭いがするような、薄茶色に染って見えてしまいました。

ははは、仕方ないさ。いまや、すべては還流水なんだから。空気だってね。新鮮なものは何もない。

浦賀利江は、理由もなく、はっとする思いがあつて、急いでさえぎった。

ごめんなさい。つまらないことを口にしてしまつて……

なぜか、二人のあいだでは口にしてはいけない種類の雰囲気をつい、口に出してしまつた、という気がした。詫びたことが一層うまくなかつた心地がする。

ですけど、そのかわりに、かえつて勇氣のような、意欲のようなものがとたんに湧いてきました。祖母や母があつたあたりで生きていた少女時代も、その後苦勞して生きていた時代も、なんだからよりも人間が生き生きしていて、本質的なもので充実していたのだ、とそんなふうに思われてきて、元氣が出て来たようです。とにかくやってみよう……

事實、そうだったんだと思うね。あのころの日本人、野蠻で幼稚ではあつたかも知れないけど、いや、確かにそうにはちがいないだろうけど、現在よりは生命の充実感がある、と思うよ。強い存在感があるものね。あのころの人たちには。

どうやら、微妙なところを脱出した、と浦賀利江は思った。二人の間柄は、あくまでも人工的な飯の絆でしかない、と承知している。うっかり取り落せばひとたまりもなく壊れてしまうものだ、という覚悟のようなものをいつも持つている。ほんのちよつとした手順のちがひ、勘の狂いで、まったくその氣ではなくても取り落しかねない危うさがある。どちらか一方が、面倒だな、とか、ああ、疲れた、とか思つてしまえば、それっきりになつてしまふ。努力で支え合つてきた飯の絆は、どちらもよくわかつている。

そういう危い關係を維持してゆくための緊張感が、一方で生きる源泉の役目もしているといつた、計算しにくい、入り組んだ氣持の唐草模様にも氣がついている。

休みの間もこちらかい？

もちろんです、どこにも行くつもりありません。そのあいだに少しでも手をつけてみたいと思っています、この仕事に。

そう、そりゃいいね。

彼女の方からは、男がこの休暇を——といっても彼の方は毎日の勤めではなかったが、学校の方は自分まとまった休暇のはずであった——年末年始をどう過すのか訊かなかった。家庭のある男の、年末年始の過し方など訊くがものはあるまい。これもしかし、さりげない努力の一つではあった。

お仕事はかどりましたか。

いや、駄目だね、予定の七分通りも出来なかった。

急に疲労が出たような声になった。浦賀利江はしかし、なんとはなしに男の自分へのいたわりを感じた。微かに演技のにおいがするとも思う。仕事がかどらなかつた、こと、疲労しているということ、それがどうして女へのいたわりになるというのか。彼はそう意識しているわけではないが、無意識にこそそう行動し、考えているのは、女の方でも無意識にわかる。膚から膚へのように伝わるものがある。七年間の絆の蓄積してきたものの作用であらうか。

五日にはもうこちらに來ている。一月中にはどうしても仕上げなくちゃならないんだ。

家庭のことなんかまけちゃいられないんだ、というふうに聞える。仕事だけに打ちこんでいる気持を強調している。少くとも、彼女にそう受けとらせたい気配を、浦賀利江はゆとりのある気持で聞いていた。